



Title	在外韓国人の言語生活
Author(s)	任, 榮哲
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37256
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【 3 】

氏名・（本籍）	いむ 任	よん 栄	ちよる 哲
学位の種類	学	術	博 士
学位記番号	第	9 4 4 7	号
学位授与の日付	平成 2 年 12 月 20 日		
学位授与の要件	文学研究科日本学専攻 学位規則第5条第1項該当		
学位論文題目	在外韓国人の言語生活		
論文審査委員	(主査) 教 授 徳川 宗賢		
	(副査) 教 授 佐治 圭三 助教授 真田 信治		

論文内容の要旨

朝鮮族は、朝鮮半島の祖国以外に、主に中国、米国、日本、ソ連、ドイツなどの国に散在する。その数は約500万人にのぼる。しかし、その歴史や生活実態などの研究はまだ不十分である。彼らはどのような時代的背景のもとに、どのような過程を経て形成されたのか。また、彼らの社会生活環境や意識構造あるいは言語生活の実態はどのようなものであろうか。その解明は重要なテーマである。しかし、いままでのところ、そうした面での調査研究は多くはない。特に言語生活に関する研究は皆無に等しい。いうまでもなく、「言語」は彼らにとっての差し迫った現実問題である。定住国で普通の社会生活を営み、また円滑な意思疎通を行うためにはその国の言語を習得し、日常使用しなければならないからである。

本論文は、このような観点から、海外に居住する韓国人および韓国系の人々（以下、「在外韓国人」と総称）の言語生活の実態とその背景にある要因を明らかにするために、その代表として、日本のような単一的民族・単一的言語の社会に住む「在日韓国人」と、アメリカのような多民族・多言語の社会に住む「在米韓国人」を対象として、社会言語学的視角からの国際比較研究を行ったものである。

本論文は、大きく序章、本論に当たる第1章から第6章、付録に分かれる。

まず、序章では、研究の目的、在外韓国人の言語生活に関する社会言語学的調査の必要性などとともに、本論文についての全体的な輪郭が述べられる。

第1章では、在日・在米韓国人がどのような時代的な背景のもとで、どのような歴史的な過程を経て形成されたのか、また、現今の彼らの状況はどうであるか、が取り上げられる。具体的には、形成の歴史と人口の推移、居住地域と人口の分布、職業、出身地と世代別の構成比、教育機関と学歴などである。すな

わち、ここでは彼らの言語生活の実態とその背景に存在する要因を分析するための最低限必要な情報が提供される。

第2章では、「日本」「米国」「韓国」における三つの調査の方法（調査地域の選定，調査対象者の抽出，調査期間等）や被調査者の属性（性別，年齢，学歴，職業，出身地，居住歴等），そして分析の方法（大阪大学大型コンピュータ利用）などが詳しく述べられる。

第3章では、移住者の異文化への適応度と家庭の中における民族文化の伝承度、民族的なアイデンティティ、定住国での社会生活環境に対する認識など、在日・在米韓国人の意識構造の一端にかかわる問題が取り上げられる。ここで明らかにし得たことを例示すると、次のようである。(1)在日韓国人より在米韓国人のほうに民族意識が強い。(2)男女別では、在日・在米韓国人ともにほとんど差が見られない。(3)世代別では、在日・在米韓国人ともに祖国生まれの1世と2・3世とにはかなりの断層が存在し、2世3世と世代が進むにつれて、民族意識が薄れていく傾向が見られる。(4)学歴別では、在日・在米韓国人ともに高学歴層ほど民族意識が強い。(5)在日韓国人より在米韓国人のほうに帰国志向者が多い。それは異文化への不適応と言語能力の不足のためであるが、ほかにもさまざまな理由がある。

第4章では、在日・在米韓国人の言語生活と言語行動について細かく4節に分けて考察している。第1節では、言語能力に関して、例えば母国語への関心度や母国語の学習経験の有無などとの相関を分析している。第2節では、定住国で母国語をしゃべることの当為性、次の世代への母国語の伝承意識、外国語意識など、いわゆる言語意識に関する被調査者の内省を詳しく記している。第3節では、母国語と定住国のことばとの使い分けをめぐる、「話し相手」と「場面」によってどう違うかを考察している。ここで得られた知見を次に掲げる。(1)在米韓国人の場合、家庭の中で韓国語がよく使われ、韓国語優位の二重言語生活をしている人々が多い。それに対して、在日韓国人の場合は、日本語だけを使うモノリンガル化が進んでいる。(2)在日・在米韓国人ともに話し相手が自分より年上であるほど韓国語がよく使われる。(3)在米韓国人の場合、どんな場面でも英語より韓国語がよく使われるが、公的でフォーマルな場面よりも私的でインフォーマルな場面でも多く韓国語が使われる。それに対して、在日韓国人の場合は、どんな場面でも韓国語より日本語がよく使われるが、私的でインフォーマルな場面よりも公的でフォーマルな場面でも韓国語がより多く使われる。(4)在日韓国人の大多数は通名という日本名で生活している。通名は特に日本生まれの2・3世に所持者が多い。(5)通名は場面を通じてよく使われる。本名を名乗る場面は、同胞が集まるといった場面であり、日本人が混じるような場面では本名の使用率は激減する。なお、第4節では、移住に伴うことばの保持と変容の過程について取り上げている。具体的な項目は、擬音語・擬声語のとらえ方、夢の中や数を暗算するときの使用語などである。

第5章では、韓国内に住む韓国人の言語生活について分析がなされる。具体的には、敬語意識、方言・標準語意識、母国語・外国語意識、韓国人の日本語に対するイメージ、対人接触行動などが調査された。ここでは、日本語のイメージに関する知見の一端を掲げる。韓国人の日本語に対するイメージは、(1)全体として、「軽快で柔らかく感じるが、好きではない」というものである。(2)男女別では、男性の方にプラス評価がやや多いものの、その差は少ない。(3)年齢別では、年代が低くなるにつれてマイナス評価が増え、プラス評価が減っていく傾向が認められる。(4)職業別では、給与生活者、経営・自営者にプラス評価が多

く、マイナス評価は、特に、生徒・学生において顕著である。(5)地域別では、評価に関して、大体三つにグループ分けができるようである。好意的なグループは「慶尚道と済州道」、非好意的なグループは「江原道と全羅道」、そして、その中間のグループに「ソウル、京畿道、忠清道」がある。

第6章では、今後の在外韓国人の言語生活の調査研究のため、今回の調査で足りなかった点、うまくいかなかった点など、調査の反省や将来の課題などが述べられる。例えば、(1)今回の調査では在日韓国人と在米韓国人を比較・対照研究の対象としたが、これからは、中国やソ連に住む朝鮮族の人々にも調査を広げていく必要があること、(2)政治的な立場に偏らず、在日1世が高齢化してその数が少なくなっている今日、さまざまな出自の、ただし原国籍を維持している人々、日本に帰化した人々の、それぞれのグループを対象とした緊急調査が必要とされること、などである。

最後に付録として、今回の三つの調査で用いられた調査票と膨大な単純集計表とが巻末に添えられている。それはこれからの5年、そして10年後の繰り返し調査や通時的研究のためにも貴重な資料となるものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、在外韓国人および韓国人 2,223 名を対象として留置自記式の調査を行い、彼らの言語生活について、社会言語学的な観点から、社会的な属性との相関を分析、考察し、その実態を明らかにしたものである。

何よりも評価すべきは、筆者が、対照二言語併用研究の新境地を開拓したところにある。そこには比較の枠の設定についての独自の理論の構築があり特筆に値する。日本における対照社会言語学研究の礎石となるべき研究といえる。例えば、在日韓国人の老年層は日常生活の上では日本語を使うのであるが、夢の中では韓国語で話すという人がかなり存在するといった実態などは対照二言語併用研究に新しい興味ある視点を導入した。

わが国における異言語間接触、二言語併用に関する研究対象の一つとして、在日外国人約85万人のうちの80%を占める(1987年現在)といわれる在日韓国・朝鮮人の言語生活の実態の解明というテーマがある。このテーマは社会言語学としてもっと取り組まなければならないはずであり、そしておそらくその認識は多くの研究者が共有しているはずであるが、この方面の調査には、さまざまな問題がからんで困難がある上に、客観的、科学的な取り扱いのむずかしいところがあって、研究はほとんど進んではいないのである。筆者は、在日韓国人を対象に調査を行い、この分野での研究に新たな展望を開いた。本論文はその点でも画期的なものである。

さらに本論文の評価すべき大きな点は、アメリカに住む在米韓国人を対象を広げたことである。筆者は直接アメリカに出向き、東部のニューヨーク、中西部のシカゴ、そして南部のヒューストンの3地域で韓国人社会に入って調査を実施した。アメリカでの実態と日本での実態の対照結果は極めて興味深い。例えば、母国語の伝承に関して、「母国語を話すべきだ」といった意識は在日韓国人より在米韓国人の方に

圧倒的に強いこと、そして、在日韓国人の特に若年層においては母国語である韓国語を外国語と意識する傾向が顕著に現れていることなどを具体的なデータで示したのは貴重である。

ところで、本研究では「在外韓国人」と韓国内に住む「韓国人」との言語生活の実態を対照することにより、両者の差異がより一層浮き彫りになるとの考えから、韓国人に対する言語調査も併せて行っているのであるが、本論文においてはこの両者の対照研究は十分になされているとはいいがたい。しかしながら、この点は自ら研究を推進する能力を持つ筆者の今後の分析にまつべきであろう。

なお、本論文では韓国人と日本人の言語行動、言語意識についても詳しい対照研究がなされている。例えば、敬語の使用度に関して、韓国人は「今のままでいい」という現状維持派が多いのに対し、日本人は「今より減らした方がいい」という回答がもっとも多いことを明らかにした点などは対照社会言語学の将来に明るい見通しを与えるものとして意義深い。

以上のように、本論文は労作であり、すぐれた学問的業績である。学術博士（課程）の学位申請論文として十分の価値を有するものと認定する。